

地域看護学への学生の学習意欲を高める試み： 「しおさい会（保健師同窓会）」会員への保健師経験に関する インタビューを地域看護学概論に導入した効果の検討

大野佳子¹，小林奈美²，相星 香³，山本真梨子⁴，森 隆子¹

要旨 地域看護学に初めて接する学生にとって、地域住民全体を支援する活動はイメージし難く学習意欲を持ち難い。そこで保健師としての経験豊富な本学同窓会員の協力を得て、学生が保健師活動の真髓を知る上で重要と考えたインタビューを取り入れた。質的研究手法により語りを振り返り、「保健師魂」「保健師の専門性」を把握する試みを授業に導入した。学習意欲の変化を評価するため、科目履修者2年次90人の学生に対し、最終講義終了後に受講による自分の変化（16項目）、その影響要因（12項目）、役立った内容（14項目）それぞれ5件法によるアンケート調査を無記名で実施した。有効回答82人（91%）の集計結果より、受講による変化は、「関心が高くなった」89%、「学習意欲が高まった」87%であり、その影響要因として「協力者の熱意」90%、「人柄」89%、役立った内容は「インタビュー経験」98%、「グループワーク」83%であった。

Key words : 質的研究，基礎教育，同窓会員，保健師魂，保健師の専門性

I. 緒言

大学における看護基礎教育の現状として、平成9年の「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」（「指定規則」）において制度化された統合カリキュラムにより、4年間の学士課程教育の中で保健師教育が必修となった。これに伴い保健師教育の単位履修が卒業要件の一つとなったが、平成4年「看護師等の人材確保の促進に関する法律」施行後の看護系大学の急激な増加と併せ、実習場所の不足や学生のモチベーションの低下が全国的に問題化してきた。このため「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」（「大学検討会」）では、統合カリキュラムの見直しについて議論しており、選択制の導入（保健師教育履修科目を卒業要件としない）、保健師、助産師教育を専攻科や大学院などで重点的に実施すること等が検討されている。但し、学生側の学習意欲や適切な教

授体制が十分な場合、選択制で保健師、助産師教育も可能としている。

一方、看護基礎教育において、学生の学習意欲を高める試みについては、実習や学内演習による多くの報告^{1)~3)}がされてきたが、保健師への学習意欲向上に特化した基礎教育の工夫や試みの報告は少ない^{4)~5)}。また、看護学生の学習意欲向上のために同職種の先輩との出会いの体験による効果についての報告も少ない^{6)~7)}。さらに、基礎教育において質的研究手法を取り入れて学習意欲の向上を試みた研究報告は見当たらず、博士課程院生に質的研究法を適用した場合の効果についての報告のみであった⁸⁾。

社会ニーズの多様化に対応できる人材育成のために、看護学生は学習意欲の向上に加え、コミュニケーション能力や創造的思考力の育成が求められる。これを実現す

¹ 鹿児島大学医学部保健学科地域看護・看護情報学講座、

² 北里大学看護学部、

³ 北里大学大学院看護学研究科、

⁴ 首都大学東京大学院人間健康科学研究科

連絡先：大野 佳子

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6794 E-mail : oyoshiko@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

るための効果的な授業の組み立てが要求されるが、学生が自らの面接体験等について質的研究手法を用いて帰納的にまとめた報告例は看護学部基礎教育においては見当たらない。また、授業で学生自身が質的研究手法を用いてインタビュー演習を行うことによって、学習意欲を高める演習効果を報告した例はない。

本学において、地域看護学の初学者である2年次の学生が、経験豊かな保健師に対してインタビューの経験をした後、帰納的アプローチにより保健師について概念図を作成し、発表することが学習意欲の向上につながるか否かについて、効果を検討したので報告する。

II. 方法

1. 用語の定義

「保健師」とは、**「看護学と公衆衛生学、社会科学の基盤を持ち、厚生労働大臣の免許を受け、保健師の名称を用いて保健指導に従事すると共に、一定の集団もしくは地域での生活者全体に焦点を当て、その生活者全体の健康の保持増進に向けた活動を展開する看護専門職種であり⁹⁾、養護教諭も含むこととする。」**と定義した。

「保健師の専門性」とは、アメリカ、カナダ、イギリスでそのコア能力や実践基準が設けられており、日本における提案^{9,10)}もあるが、今回はそれらを前提とせず、**「学生が授業の学習を通して自由に考えた内容とする。」」**と定義した。

「保健師魂」とは、保健師の専門性と同様に日本における提案^{9,10)}があるが、今回はそれらを前提とせず、**「学生が授業の学習を通して自由に考えた内容とする。」」**と定義した。

2. 調査対象

本学において看護基礎教育を学ぶ学生のうち、「地域看護学概論」を履修する2年次学部学生80名及び3年次編入学生10名の計90名である。

なお、インタビューにご協力頂いた先生（以下、協力者とする）は、同大学の卒業生であり、保健師同窓会「しおさい会」会員の中で長年地域看護活動に従事した会員のうち、概ね60歳以上で現役の保健師活動を行っていない者で、大学キャンパスより20キロ以内に居住する、説明による同意を得た13名である。

3. 調査期間

2007年10月18日～12月19日

4. 調査方法

質問紙による自記式集合調査を行った。質問紙は12月18日の講義に出席した学生に直接配布し、回答用紙は配

布会場にて回収した。

5. インタビュー内容

インタビュー準備のための講義のなかで、インタビュー内容に含むこととして、以下の内容を例示した。「先輩たちの時代の実習・学習」、「どのような思いで取り組んだのか」、「なぜ、その職業を選んだのか」、「仕事の経験はどのようなものだったのか」、「その仕事を続けることは（もしくはやめることは）、人生にとってどのような意味があったのか」、「定年をむかえたとき、どのような思いであったか」、「職業人として、何を一番大切にしていたか」、「一番印象に残っている事例や事件は何か」、「一番辛かったこと、一番嬉しかったこと、最もやりがいを感じたこと」、「私たち後輩に期待することはどのようなことか」これらを基に、各班で内容を話し合って班毎により独自に質問内容を決定した。

6. 調査内容

インタビューの効果を調べるために、以下の計42項目の調査項目により構成した。

- 1) 「受講前後で変化した内容」16項目（地域看護学への関心、学習意欲、保健師への関心、保健師への進路希望、保健師魂への理解、保健師の専門性への理解、マナーの習得、コミュニケーションスキルの向上、自分への自信、地域看護職をめざすことへの関心、看護学を学ぶ楽しみ、看護学を学ぶ自信、地域看護学実習に臨む楽しみ、後輩へインタビューを勧める気持ち、今後の科目でもインタビューを行いたい気持ち、本講義への総合的満足度）
- 2) 「変化に影響した要因」12項目（協力者の人柄、協力者の話された内容、協力者のような看護職になりたいと思ったこと、協力者の生き方に感動したこと、協力者の仕事に対する熱意、協力者から受けたおもてなし、自分にとってインタビューが有意義だったこと、全体を通してこの科目のめざす目標が明確だったこと、科目の講義内容の組み立て方が分りやすかったこと、教員がインタビュー準備に細やかに関わったこと、教員がインタビューのまとめを行う作業に細やかに関わったこと、教員から講義にのぞむ姿勢・態度について注意を受けたこと）
- 3) 「学習に役立ったこと」14項目（地域看護学概要についての講義、保健師同窓会しおさい会歴史の紹介、個人課題レポート作成；インタビューの目的・内容・のぞむ姿、インタビュー内容や役割分担の決定、ハガキと電話によるインタビュー対象者への事前挨拶、インタビューを行うまでの教員の関わり、インタビューの経験、インタビューを用いた研究方法を学んだこと、

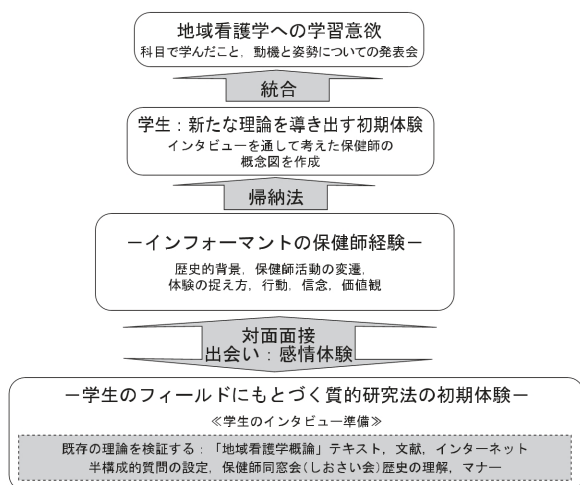


図1 「地域看護学概論」科目の組み立て

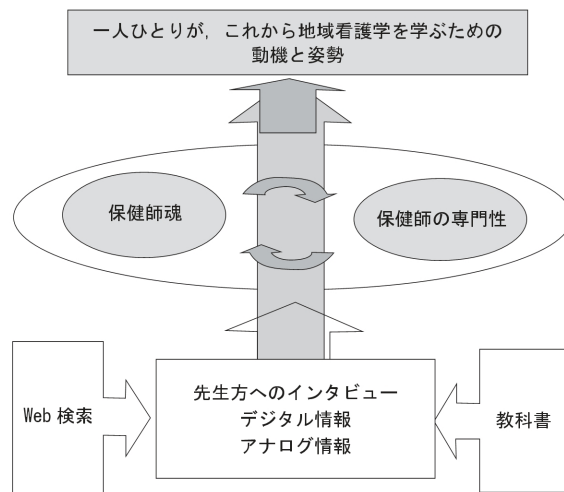


図2 授業で提示した概念モデリング

インタビューのとらえ方について学んだこと、個人課題レポートの作成；インタビューのまとめ、全体発表に向けてのグループワーク、インタビューのまとめを進めるときの教員の関わり、Web上の情報、教科書・参考書)

以上の42項目について、5件法（強く思う、やや思う、どちらでもない、あまり思わない、全く思わない）のリッカート尺度で測定した。

4) また、自由記述は「この科目を通して学んだこと」、「これから地域看護学をどのような姿勢と動機で学ぶか」について記入欄を設けた。

7. 科目の組み立て

本科目の講義内容の組み立てについては図1のとおりである。講義の目的を「保健師魂」と「保健師の専門性」を明らかにする過程で地域看護学学習への動機を高めることに設定し、協力者へのインタビューをとおして、これらの概念について考察することを課題とした。事前準備としてインタビューを用いた質的研究法について講義し、インタビューの半構成的質問項目の設定を行い、インタビューの技法・とらえ方、訪問のマナーについても学習し、対面面接、帰納法、統合することにより地域看護学への学習意欲を引き出すことを意図した。インタビューは協力者1名に対し学生1班（4-5名）で実施し、協力者4名に1回、9名に2回のインタビューを自宅と大学で実施した。それぞれの班は講義の目的にそって事前に4つの質問項目を用意し、協力者にハガキで知らせた。

なお、学生へ提示した概念モデリングは図2のとおりである。

8. 学生による「保健師の専門性」と「保健師魂」の関連図の作成

図1の帰納法から統合へのプロセスにおいて班毎に学生が考えた概念図を作成した。

9. 解析方法

5件法で得られたデータについて、全項目の記述統計値「強く思う」「やや思う」の累積%を算出した。

10. 倫理的配慮

インタビュー協力者に依頼する前の倫理的手続きとして、本学保健師同窓会「しおさい会」の役員会及び総会において、研究の趣旨および方法について議案を提出し、全員及び多数の同意を得た。各協力者に対し、研究および今回の授業での取り組みの趣旨、研究参加の自由意思、途中自体の自由、プライバシーの保護、個人情報の守秘の厳守、研究参加に伴う利益と不利益について口頭および文書で説明し、文書による同意を得た。また、学生に対し、研究の趣旨説明、回答と成績判定は無関係で自由参加であること、回答しなくても不利益を被ることはないことを口頭および文書で説明し、文書による同意を得た。質問紙は無記名で学籍番号記入は自由意思とし、質問紙の回収をもって同意とみなした。

III. 結果

配布した質問紙90部の回収率は92.2%（83部）、有効回答は91.1%（82部）であった。また、正規性の検定の結果有意差がなかったため、5段階尺度を間隔尺度として用いた。学生は班毎に独自の「保健師の専門性」と

「保健師魂」に関する関連図を作成し、発表を行った。

1. 調査対象者の特性

今回の調査対象者は、インタビュー協力者について表

1、受講学生について表2のとおりであった。

2. 受講前後で変化した内容について(表3)

「地域看護学へ関心を持つようになった(89.0% ; 以

表1 協力者の特性(N=13)

| | | 度数 | (%) |
|------|--------|-----|-------|
| 性別 | 女性 | 13名 | 100% |
| 年齢 | 60歳代 | 8名 | 61.5% |
| | 70歳代 | 4名 | 30.8% |
| | 80歳代 | 1名 | 7.7% |
| 卒業年度 | 昭和20年代 | 4名 | 30.8% |
| | 昭和30年代 | 4名 | 30.8% |
| | 昭和40年代 | 5名 | 38.4% |
| 職種 | 保健師 | 12名 | 92.3% |
| | 養護教諭 | 1名 | 7.7% |

表2 学生の特性(N=82)

| | | 度数 | (%) |
|------|---------|-----|-------|
| 性別 | 男性 | 10名 | 12.2% |
| | 女性 | 66名 | 80.5% |
| | 無回答 | 6名 | 7.3% |
| 入学年度 | 2年生 | 67名 | 81.7% |
| | 3年生(編入) | 9名 | 11.0% |
| | 無回答 | 6名 | 7.3% |

表3 受講前後で変化した内容

| | 肯定回答の割合(%) | N |
|--------------------------------|------------|----|
| より地域看護学に関心・興味をもつようになった | 89.0 | 82 |
| 後輩に対し、来年度もインタビューを行うことをすすめたい | 87.8 | 82 |
| より地域看護学を学びたいと思うようになった | 86.6 | 82 |
| より保健師もしくは養護教諭に関心・興味をもつようになった | 86.6 | 82 |
| 社会人にふさわしいマナーを身につけることができた | 85.4 | 82 |
| 総合的にみて、この講義に満足している | 83.1 | 77 |
| 自分なりに保健師の専門性について理解できるようになった | 80.2 | 81 |
| 将来、看護職として働くことへの関心・興味が高まった | 78.0 | 82 |
| 自分に自信がついた | 70.7 | 82 |
| 看護学を学ぶことが楽しみになった | 69.5 | 82 |
| 自分なりに保健師魂について理解できるようになった | 69.1 | 81 |
| 地域看護学実習が楽しみになった | 68.3 | 82 |
| 自分のコミュニケーションスキルが高まった | 58.5 | 82 |
| 3・4年生の地域看護学に関する科目でもインタビューを行いたい | 55.0 | 80 |
| より保健師もしくは養護教諭をめざしたいと思うようになった | 51.2 | 82 |
| 看護学を学ぶことに自信がもてるようになった | 39.0 | 82 |

下、累積%)」、「後輩に対し来年度もインタビューを行うことをすすめたい(87.8%)」、「地域看護学を学びたいと思うようになった(86.6%)」の順に高かった。

3. 変化に影響した要因について(表4)

「協力者の仕事に対する熱意(90.2%)」「協力者のお人柄(89.0%)」、「協力者が話して下さった内容(89.0%)」の順に高かった。

4. 学習に役立ったことについて(表5)

「インタビューの経験(97.6%)」、「全体発表に向けてのグループワーク(82.9%)」、「ハガキと電話による協力者への事前挨拶(81.7%)」の順に高かった。

5. 自由記述の結果

1) この科目を通して学んだこと

【保健師についての新たな発見】

保健指導法を作り出してきた事への驚き、今まで曖昧だった保健師や地域看護のイメージがわいた、保健師つ

表4 変化に影響した要因

| | 肯定回答の割合(%) | N |
|-------------------------------------|------------|----|
| インタビューにご協力いただいた先生の仕事に対する熱意 | 90.2 | 82 |
| インタビューにご協力いただいた先生のお人柄 | 89.0 | 82 |
| インタビューにご協力いただいた先生が話して下さった内容 | 89.0 | 82 |
| インタビューにご協力いただいた先生から受けたおもてなし | 87.7 | 81 |
| 自分にとってインタビューが有意義だったこと | 85.4 | 82 |
| インタビューにご協力いただいた先生の生き方に感動したこと | 74.4 | 82 |
| 教員がインタビューの事前準備に細やかにかかわったこと | 72.0 | 82 |
| インタビューにご協力いただいた先生のような看護職になりたいと思ったこと | 70.7 | 82 |
| 教員がインタビューのまとめを行う作業に細やかにかかわったこと | 62.2 | 82 |
| 全体を通して、この科目のめざす目標が明確だったこと | 58.5 | 82 |
| 教員から講義にのぞむ姿勢・態度について注意を受けたこと | 56.8 | 81 |
| この科目の講義内容の組み立て方がわかりやすかったこと | 46.3 | 82 |

表5 学習に役立ったこと

| | 肯定回答の割合(%) | N |
|-------------------------------|------------|----|
| インタビューの経験(11/2~11/30) | 97.6 | 82 |
| 全体発表に向けてのグループワーク | 82.9 | 82 |
| ハガキと電話によるインタビュー対象者への事前挨拶 | 81.7 | 82 |
| インタビューのとらえかたについて学んだこと | 81.5 | 81 |
| インタビューを用いた研究方法を学んだこと | 78.0 | 82 |
| 個人課題レポート作成(インタビューの目的・内容・のぞむ姿) | 75.6 | 82 |
| 個人課題レポート作成(インタビューのまとめ) | 75.6 | 82 |
| インタビューを行うまでの教員のかかわり | 74.1 | 81 |
| インタビュー内容や役割分担の決定(10/30・11/6) | 66.7 | 81 |
| 地域看護学の概要についての講義(10/2・10/9) | 63.4 | 82 |
| インタビューのまとめを進めるときの教員のかかわり | 58.0 | 81 |
| 教科書、参考書 | 52.7 | 74 |
| web上の情報 | 52.5 | 80 |
| しおさい会の歴史の紹介(10/9) | 37.8 | 82 |

て楽しい仕事なんだな、保健師の仕事は一方的に何かを提供するのではなく住民から教えられることも多い、地域看護はその人の一生の歴史をみながらその人にあったように指導すること、保健師を知ることが出来て将来の自分の道が広がった。

【信頼関係を築くこと】

人格を尊重し真剣に向き合う、信頼されるように自分を磨く、「相手を敬う」ということの大切さ、家族にさえも見捨てられた患者への真心、周りの人が支えてくれているから自分は進むことができる、お互いがお互いを高めあう存在であることの自覚。

【専門職としての姿勢】

将来、プロになるという自覚が大切、自分の日常生活の積み重ねが専門性に活かされる、自分の職業に誇りを持つことの大切さ、自分の選んだ道を信じる、“専門性がなければせつかくの保健師魂は活かせない！”，“保健師魂がなければ専門性はただのお役所仕事！”

2) これからの姿勢と動機

【自身の意欲が向上したこと】

日常の何気ない事実から読み取れるような鋭い感受性を育てていきたい、保健師のことをもっと知りたいと思った、自分が目指す職業に責任感を持って学んでいきたい、常にその人の健康を守りたいという思いを忘れない、今のうちにできることを積極的に経験したい、地域住民のために活動していく保健師の仕事を学びたい。

【他者との関わりの中での姿勢と動機】

『様々な人々との出会い』の一つ一つを確かな経験としたい、使えるコミュニケーション技術を身につけていきたい、インタビューから学んだ“人との関わり”を感じながら学ぶ。

【先輩保健師から学んだ姿勢】

“為せば成る、為さねば成らぬ何事も成らぬは人の為さぬ成りけり”，院内看護と地域看護の違いを理解する、こういう保健師でありたいという理想像をもつ、Y先生みたいになりたいと思ったので受動的ではなく積極的に楽しみながら学んでいきたい。

IV. 考 察

今回、看護基礎教育の統合カリキュラムのなかで、学生が経験豊かな保健師にインタビューを経験できたことは、学生の意欲向上に効果的であった。また、学生は自由な発想と話し合いで独自の関連図を作成し、インタビューによる概念化は可能であったと考える。

1. 保健師経験に関するインタビューの効果

我々は初学時である2年次に、「人から学ぶ体験」す

なわち地域に出る体験、地域で暮らす人々の話をゆっくり聞き体験をすることで、地域から学ぶことができると考えた。学生は自由記述の中で他者との関わりの中で姿勢と動機を獲得したと自己評価していたことから、意図した効果は得られたと考える。しかし、学生の背景として卒業時に看護学へのモチベーションの高い学生が必ずしも保健師志望ではなく、逆に保健師を希望しても採用が減っており、進路希望と採用のミスマッチが学生の地域看護学への意欲に負の影響を及ぼしていることも考えられるため、今後卒業時までのフォローアップが必要と考える。

2. 地域看護学への関心の高まりと授業の組み立て

保健師をめざしたいと思うようになったこと、協力者のような保健師になりたい等の自由記述結果から、地域看護職を目指したいという思いが高まるには、協力者というロールモデルとの出会いや協力者の生き方に直接触れ、感動したことが主な要因と考える。また、このような効果を上げるためには、構成された意図的な授業の組み立てが重要である。今回、学生が質的研究法の初期体験ともいえる“語られた言葉”を可能な限り逐語録にし、インタビューを通して学んだ保健師の専門性と保健師魂について学生が受けとめた概念図を作成することが、学習の統合を助長し、学習意欲へ繋がったと考える。

学習意欲が向上した学生は、自信を深め講義に積極的になった一方で、看護学学習への自信を高められない学生もいた。講義に積極的に臨めない学生に対しては、学生が多様化している現状から他のアプローチ法、例えばグループワーク方法の更なる工夫、学生の相談に個別に対応する、必要時にカウンセリングや進路相談等を検討する必要がある。

3. 保健師の基礎教育に求められること

公衆衛生の発展のために保健師養成の検討は喫緊の課題であるとの考え¹¹⁾から、各養成校における保健師資格の質を保証する基礎教育カリキュラムの内容充実と再構築が重要な課題といえる。保健師の専門性については、これまで職域ごとに様々な議論がなされてきたが、保健師の技術やプロ意識はどのようにして修得されるのであろうか。これまで保健師の専門性を養成する研究においては、ケースメソッドやペーパー・ペーシェントを通して教育効果を検討する試み^{12),13)}、地区踏査やグループワークなどの演習を通して保健師への理解や関心を高める試み¹⁴⁾、早期体験学習による責任感を養う試み¹⁵⁾等がされてきた。本学では、本学の地域看護学関連の授業が初めて開講される「地域看護学概論」において、本学を卒業した先達である保健師を人的資源として活用することに

より、学生のモチベーションや意欲が向上したと考える。

次世代に保健師活動の歴史を語り継ぎ、つないでいくことを重視する活動例¹⁶⁾があり、また生命のラインを守る公衆衛生そのものが魂であるという見方¹⁷⁾から、一人一人の保健師が魂のバトンを持つ継走者となり得るように、どのように時代背景が変化しても普遍的な基礎教育および現任教育を継続していきたい。

本研究の限界

今回、本学の先輩保健師に対してインタビュー演習を取り入れたのは初めての試みであり、次年度の学生についても同様の結果が得られるのか、反復性・再現性を有するかについての検討は行っていない。また、一地域の一大学の対象に限定され分析対象者数が少ないため、今回の結果に汎用性があるとは言いがたい。今後は、再現性の検討とともに、他大学の地域特性に応じた人材活用が学生にどのような影響を及ぼすか検討する必要がある。

V. 結論

インタビュー実施は学生の関心や意欲向上に一定の効果があった。学生は変化の要因として、インタビュー経験や協力者の人柄・熱意を高く評価していた。学習意欲が向上した一方で、積極的に臨めない学生に対しては、他のアプローチも検討する必要がある。

謝辞

最後に、調査を許可し、多大なご協力を頂きました鹿児島大学保健師同窓会「しおさい会」の梅木秀子会長はじめ会員の皆様と、アンケート協力に応じてくれた学生に、心から感謝致申し上げます。

文献

- 1) 秋元園子：看護基礎教育課程における学生の学習意欲に影響を及ぼす要因 講義における教員と学生の相互作用に焦点をあてて。神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 2009; 34: 23-30
- 2) 加藤法子, 瀧野由夏, 永嶋由理子 他：基礎看護実習 I における教育効果の検討：実習前後の学習意欲の変化から。福岡県立大学看護学研究紀要 2008; 5(2): 52-60
- 3) 松枝美智子, 安永薫梨, 安田妙子 他：精神看護実習で学生の患者ケアへの内発的動機づけが高まる要因。福岡県立看護大学紀要 2008; 5(2): 66-79
- 4) 今村桃子, 弥永和美, 堤千代 他：家庭訪問の学習を深めるための授業方法 自己評価からの分析。聖マリア学院紀要 2007; 21: 79-84

- 5) 松尾和枝, 酒井康江, 蒲池千草 他：地区診断を用いた地域看護学演習の取り組みと今後の課題。日本赤十字国際看護大学 Intramural Research Report 2005; 4: 171-182
- 6) 佐居由美, 大久保暢子, 石本亜希子 他：看護学導入におけるシャドウイングアドバンスの試み。聖路加看護大学紀要 2008; 34: 70-78
- 7) 上埜千春, 山本美紀, 休波茂子：看護職の動機づけに影響を及ぼしている基礎看護学実習における看護の体験。日本看護研究学会雑誌 2009; 32 (3, suppl): 168 (会)
- 8) 戈木クレイグヒル滋子：【博士課程院性のための研究法特別講義】研究の実際 グランデッド・セオリー・アプローチの技法とその適用。看護研究 2007; 40 (3): 239-257
- 9) 平野かよ子 他：平成19年度地域保健総合推進事業「保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会報告書」。公衆衛生協会, 2008: 1-32
- 10) 金子仁子：保健師に特徴的な支援方法の強化を願って—総合大学の立場から—。保健の科学 2009; 51 (10): 682-688
- 11) 日本公衆衛生学会公衆衛生看護のあり方に関する検討委員会：「保健師のコアカリキュラムについて」中間報告書。日本公衆衛生雑誌 2005; 52(8): 756-764
- 12) 金城芳秀：ケースメソッドを通して「家庭訪問」を批判的に考える。日本公衆衛生雑誌 2005; 52(1): 26-33
- 13) 伊藤収：看護者の主観的情報処理過程に関する研究 看護学生の主観的情報過程に影響する要因の検討。岩手看護学会誌 2008; 1(1): 26-36
- 14) 大須賀恵子：看護大学性の地区診断技術を高める教育方法の検討 地区踏査・マッピングの導入。保健師ジャーナル 2006; 62(10): 876-881
- 15) 北村久美子, 藤井智子, 杉山さちよ：北海道のへき地における看護学実習の実現 医学科看護学科合同による早期体験実習。日本ルーラルナース学会誌 2009; 4: 43-50
- 16) 永江尚美, 森山佳江, 藤谷明子 他：伝えたいものとともに探りながら作成した次世代への伝承計画。保健師ジャーナル 2009; 65(6): 452-456
- 17) 荘田智彦：保健婦 魂の反攻「公衆衛生」生命のラインが危ない。家の光協会, 東京, 2001. p267-282

**An attempt to arouse students' motivation for learning:
A Study into the effects of utilizing interviews to members of
“Shiosaikai (health nurses reunion)” regarding their experiences as health
nurses to develop a community health nursing outline.**

Yoshiko Ohno¹, Nami Kobayashi², Kaori Aihoshi³, Mariko Yamamoto⁴, Ryuko Mori¹

1 Kagoshima University School of Science, 2 Kitasato University School of Nursing,
3 Kitasato University Graduate School of Nursing, 4 Tokyo Metropolitan University Graduate School of Human Health Sciences
School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima, 890-8544, Japan
E-mail: oyoshiko@health.nop.kagoshima-u.ac.jp Tel: 099-275-6794

Abstract

Nursing activities which support community residents, as a whole, tend to be difficult to imagine or draw attention for students who study community nursing for the first time. Therefore, upon cooperation of alumni reunion members, who are experienced health nurses, of this university, an attempt was adopted by the inductive approach in the outline of community health nursing. In this attempt, the students conducted interviews on the questions which they consider to be important to learn the quintessence of health nursing activities and the interview results were analyzed to understand “health nurse spirit” “expertise of a health nurse”. In order to measure the effects, an anonymous survey was conducted after the final lecture of the course amongst 90 second-year students who took this course. The questions were: the change in themselves after taking the course (16 articles), influence factors (12 articles), useful content (14 articles) and 5 levels of response were used for answers. The survey result of 82 valid responses (91%) showed the following results: “more interested 89%”, “higher motivation for learning 87%” as the change after the completing the course; “enthusiasm of co-operator 90%” “personality 89%” as influence factors, and “experience of interview 98%” “group work 89%” as useful content.

Key words: Qualitative research, Basic education, Alumna, Health nurse spirit, Expertise of health nurse